

古き〈ふみ〉を読むということ（講演録）

塩 村 耕

国文学という仕事（話の枕）

国文学の重要な任務の一つに、日本の豊かな古書の海を漂流探索し、新たな価値を見出だし、それを記述することによって、再び活性を賦与する仕事があります。最近入手した古書を見ながら、具体的に話をしましょう。

まずは『瓢金今川』。初めて見る古版本で転写本の存在も知りません。刊年不明ですが、寛文無刊記書籍目録に見え、概ね明暦万治（一六五五〜六一）頃の刊行です。内容は、近世期にとっても一般的だった武家教訓書的な往来物『今川状』を逐語的にもじりながら、「若女」つまり若衆と遊女という色の二道に遊ぶべきことを高らかに宣言するという奇書です。こんな早い時期にこういうへんてこりんなものが出版されるとは、日本の古書の世界はまことに奥深い。

ここ数年間でいちばん嬉しかった買い物で、本書については、『日本古書通信』（古通）の本年三月号に速報記事を書いたので、興味のある方は御参照下さい。

ちなみに『古通』は今や唯一の古書文化専門雑誌となつてしまいました。私はこの十七年間、岩瀬文庫の全調査に没頭してきて、もうすぐ終わるところです。その間、まさにパラダイスのような日々でしたが、唯一暗澹たる気持になることもあって、それは岩瀬文庫に大量にある、明治大正期に刊行された上質な雑誌類に触れる時です。ご存知ですか、書物文化研究では『集古』『好古叢誌』『書誌』『典籍之研究』『著書及蔵書』等々、そのほか掃苔趣味の『墳墓』『見ぬ世の友』、書簡研究の『手紙雑誌』、地方史や民俗、古書画の分野にまで及べば枚挙に遑がありません。勿論それらの雑誌を支えた素人の読者が、岩瀬弥助をはじめ、

当時は各地にたくさんいたのです。ところが、現在そんなわくわくする魅力的な内容の雑誌はすっかり影を潜めてしまった。人口にしても国民総生産にしても、当時と比較にならないほどの大国になったはずなのに……。これが現代日本の「豊かさ」の内実です。それを思い知らされる時がいちばん悲しかった。『古通』は最後の牙城みたいな良心的な雑誌なので、余力のある方は購読会員となって下さいね。

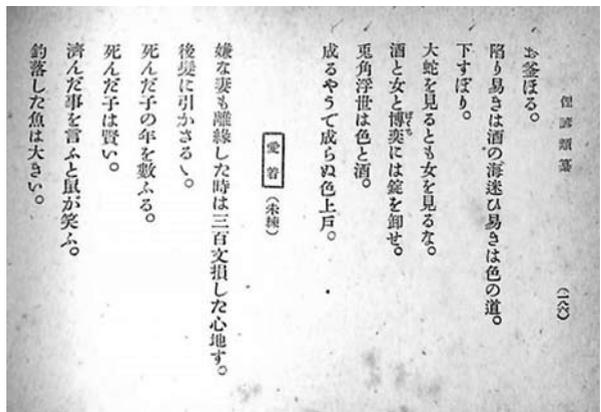
次に明治四十二年刊の活字本ですが、『俚諺類纂』。これは岩瀬文庫で見た、昭和二年刊の和装活版書『禁止本書目』の中に載っており、いわゆる発禁本です。今は便利な世の中で、ふとネットの「日本の古本屋」を見たらあったので、俄然「学術的」興味をそそられ（笑）、翌年刊の再版を、そちらの方が内容豊富ではと考え購入しました。序文を見ると、初版刊行直後に発禁処分を食らったので、具合の悪い部分に改訂を加えたところ。そこで別に初版も入手、比べてみたところ、確かに異同がありました。たとえば初版の「お釜ほる」「下すぼり」（色事に耽る者のこと）「兎角浮世は色と酒」「成るやうで成らぬ色上戸」は、改訂版でそれぞれ「色欲は身を倒す病」「賢を賢として色に易へよ」「老人の冷水」「婦人は不仁なり」と大人しいものに差し替えられています（図版1・2）。こういう、書物の異同を喜ぶのも国文学者の性分です。一つの本だけを見ていたのでは永遠にわからないことがあり、書物の異同を調べると

いうのは国文学の最も基本的な仕事です。ただし、辛気くさい作業で、近ごろではそういうことをする人が少なくなっています。

俚諺は、今は「ことわざ」というしかなくなりましたが、それだと教訓的という語感がありますね。そう

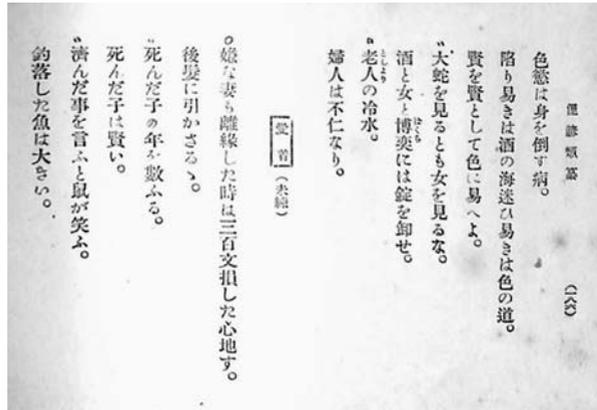
じゃないものも含め、江戸時代の前期には「世話」と呼ぶのが一般的でした。誰が言い始めたのかわからない、慣用的表現という感じですが、「人の世話になる」の「世話」の意味の方が一般的になり、減びてしまったのは残念なことです。

ところで、さっきの俚諺の中にあつた「色上戸」は、辞典に「飲むと顔の赤くなる酒飲み」とありますが、それで



図版 1

は本書でわざわざ差し替えの対象となった理由がよくわからな
い。恐らくそうではなく、好色漢に変貌するタイプの酒飲みの意かと思いま
す。そんな意馬心猿と裏腹に、性的な能力は酒のせいで減退するというのが「成るやうで成らぬ」じゃないでしようか。ただし、この俚諺の古い用例を知らず、今のは「僻心得ひがみこころ」かも知れません。昔、大学の教養部の英語の授業で読んだ、シエークスピアの『マクベス』に、同じようなことをしゃべる門番の台詞があったことを覚えていますが、あれですね。その授業で小田島雄志先生が、そういう卑猥で滑稽なことを語る軽い場面は、陰惨な場面の直前や直後に置かれて効果をもたらすものだと言っていました



図版 2

が、後に西鶴を熟読するようになって、なるほど東西同じなるかなと、しみじみわかったことです（『好色五人女』など）。

『俚諺類纂』には「餓鬼の断食悪女の賢者ぶり」ともあります。この意味はわかりますか？「悪女の賢者ぶり」は辞典に「心の悪い女が賢人のふりをして外見を装うこと」とありますが、これは明白に間違いです。「悪女」は、中島みゆきの名曲のせいで、間違った意味がすっかり定着してしまいました。ほんとうは醜い女のことです。「悪女の賢者ぶり」とは、醜女が、色欲を超越した賢者のようなふりをして独身を貫くこと。だから、「餓鬼の断食」（仕方なしにやっていることを、あたかも良いことを敢えてしているような殊勝顔をする意）と対になります。しかし、相当に強烈な毒がありますね。こうやって大勢の皆さんの前で口にするのも勇気が要る（笑）。俚諺は江戸時代をピークにして、近代以降は急速に数を減らしますが、そういった反教訓性が嫌われたことも、一つの理由でしょうね。

私の場合、古俳諧を読むのに参考となるので、俚諺関係の資料が気になるのですが、つい最近も、『俗語考』という明治大正頃の写本を入手しました（図版3）。例の『古通』に載る古書店の目録からです。日常的に用いる通俗な慣用的表現をイロハ順で集め、語源について解説を施したものです。もしかしたら原写本（転写本ではなくオリジナルの

写本) かもしれません。なかなかよく出来た本で、たとえ「ペテン」の語源について、舶来織物の商標にあるパテントの文字に由来すると書いてある。パテントをペテンと読んで、それが織物の称となり、その織物は木綿に薬物を施して絹物に見せかけたものであったことから、人を騙す意味になったそうです。辞典に見える、中国語の「骊子(ペント)」の転訛かとする通説よりも、ずっと説得力があるように思われます。著者は原田種徳端洲という未知の人で、ことばに一廉の見識のある人物と思われる、今後伝記を明かにしたいと楽しみにしています。



図版 3

以前は、国語学と国文学は一心同体でしたが、最近は何だか家庭内離婚みたいになってきた(笑)。が、それは望ましい事態ではなく、やはりお互いに助け合い補完すべきです。深く読み込んだ文献資料を軸に、口承、民俗をも参照しながら言葉の本義を定めてゆくのも国文学の不断に成すべき仕事だと思えます。

中根東里の遺文を読む

さて、日本の本題は江戸中期の漢学者で隠逸孤高の文人、中根東里(一六九四〜一七六五)の遺文を読むことです。数年前に岩瀬文庫で出てきた版本『東里遺稿』『東里外集』のおかげで知る人となりました。こんなすごい人と出会わせてくれただけでも、岩瀬文庫への感謝に堪えないことです。

その生涯を『遺稿』に載る「東里先生行状」によって駆け足で確認しておきますと、中根東里は諱若思。字敬父。通称孫平。伊豆下田の生まれ。父は三河出身の浪人で、確かに三河、特に岡崎辺には中根という家が多いそうですね。幼くして父を喪い、母の命により禅僧となります。正徳年間(一七一〜一六)、上京し華音(中国語学)を学び(一説に宇治黄檗山で悦山に師事する)、のち江戸に行き荻生徂徠に師事します。のち『孟子』浩然気章を読んで還俗し、

徂徠学を厭い、作る所の文章を悉く焼いたそうです。だいたい奇人はよくこういうことをします。のち室鳩巢に師事し、師に従い数年加賀に行きますが、享保三年（一七一八）江戸に戻り八丁堀に住みます。さらになぜか鎌倉に行き、鶴岡八幡の側で弟の叔徳と一緒に木履を鬻ぎます。間もなくまた江戸に行き弁慶橋辺で塾を開きますが、人となりは高潔で、当然貧しく、綿糸刺繍針を鬻ぎ、また竹皮履（雪駄）を売ったので、「皮履先生」と呼ばれたそうです。これは、実際には「東里先生」をもじって「草履先生」と呼ばれたのではないかと想像します。

大名家に仕えて禄を食んだりしたら、嫌な仕事も多い。あるいは塾を開いても、その束脩に依存したら、塾生にべんちゃらの一つも言わないといけなくなる。今も昔も職業としての学問や教育は難しいことが多い。私も履物屋を開いておけばよかった（笑）。

東里の思想的遍歴はさらに続き、王陽明全書を読み陽明学に志すようになります。机上の学問を嫌い、実践を重んずる学派です。享保（一七一六〜三六）の末年に、門人に招かれて下野植野（現・栃木県佐野市）に移り、そこに腰を落ち着けて私塾を開いて子弟に教えます。良いパトロンがいたのですね。そんな中、延享三年（一七四六）、弟叔徳の娘の芳子三歳を引き取り養うことになります。東里はもちろん生涯独身ですから、五十三歳で初めて出来た家族

です。隠逸の老先生が童女と暮らす姿というのは、絵になる風景だったことでしょう。老いて病気がちとなった六十歳の宝暦三年（一七五三）、姉の招きに応じ、相模の浦賀に移ります。佐野を去る際には、門人より贈られる金品を受けず、ただ紙扇のみを貰ったそうです。浦賀では海浜を観、酒を飲み、和歌を詠じて楽しむ日々でした。明和二年（一七六五）二月七日、七十二歳で病死します。お墓は浦賀の顕正寺にあります。なお、東里については、最近出た歴史家の磯田道史さんの『無私の日本人』の中に、簡にして要を得た人物素描があるので、一読を勧めておきます。

東里というのは不思議な人で、こんな風に徹底的な隠者気質で自分を表に出さなかったのに、何十年か毎に注目する人が出てきて、事績に光が当てられます。こういうのも「囊中の錐」というのでしょうか。明和二年（一七六五）に東里が七十二歳で亡くなると、翌年に下野佐野の門人須藤柳圃が遺稿を編纂し、自家の蔵版で刊行しますが、部数は少なく流布しませんでした。その後三数十年を経た享和元年（一八〇一）、須藤の一族の仲友が数十本を刷り、更に跋を大田錦城に書いてもらいますが、本格的な再版に至らなかった。更に天保九年（一八三八）、柳圃の孫子寛は板木が痛み読めなくなっていたのを憂えて重刊しようとし、古賀侗庵に跋を書いてもらいますが、また再版に至らなかった。その後、佐野の医者、服部政世が数十年を

かけて東里の雑文和歌及び書簡数十篇を集め、文久三年（一八六三）に遺稿の重刊とともに『東里外集』として公刊します。岩瀬文庫で見たのは、この文久年間に出た再版の『東里遺稿』と『東里外集』です。

『東里遺稿』中の「新瓦」は唯一のまとまった著述です（図版4）。これは延享四年、五十四歳の東里が、前年に引き取った姪の芳子がまだ四歳と幼いため、将来これを読むようにと、姪に伝えるべき思いを記したものです。そもそも書物の持つ重要な機能は、時を超えて何かを伝えることにあるのですが、こんな風に遺言そのものという書物も珍しい。

咨汝芳子汝相模人也何爲遠來居於下毛此汝父不能庇汝以爲我艱其薄才拙謀誠可笑也雖然以汝觀之其哀哀者孰大於是吾將語之往年甲子春二月二十四日汝母纔生汝未及衆汝而違世矣則愍汝憂汝者唯汝父與汝外祖母也我之愍汝雖不如汝父亦當與汝父同憂焉然相去四十里徒憂汝耳於汝何益哉汝父雖愍汝而汝之鞠則不如汝母也惟其不如汝母也是以愍汝益深愍汝益深故凡所以鞠汝者莫不至矣則雖汝母亦無以加焉其所

図版4

そこには、姪に対する愛情に溢れる思いが細やかに綴られており、これほど涙なしに読むことが難しい書物を、私はほかに知りません。

ただし、漢文、しかも白文で、相当歯ごたえがある。四書五経をはじめとする典拠を縦横に駆使するからです。しかしながら、最近ではネットで、中国や台湾で作られた漢籍古書の全文データベースが整備されています。パソコンさえあれば、まるで林羅山先生を傍らに侍らせているかのようになり、典拠や字義を教えてもらいながら、レベルの高い読書を進めることが出来るのです。これは先人の嘗て知らざる快楽ですから、そんな新たな読書法を是非体験してみてください。

そもそも国文学というのは、明治時代に漢文学に対する学問として成立したものです。そして、本来、国文学は国の文学ではなく、国文の学なのだと思います。つまり和文なしの和漢混淆文で書かれた書物を扱う学問なのです。しかしながら、これからの時代の国文学はそれだけではだめです。岩瀬文庫の全調査をやってみて、過去の日本人が書き残した書物の半ばは漢文であることをつくづく思い知りました。明治大正ごろまでは漢文の素養があったから、そんなものも普通に読みこなせました。これからは、新しい道具を使って素養不足を補いながら、どんどん漢文を読んで、広く日本の書物全般を扱うことこそが、国文学の仕

事だと思えます。

話を東里の「新瓦」に戻しましょう。そこではまず初めに、幼い芳子が父親の手を離れて、伯父に預けられるに至った経緯が詳しく述べられています。芳子は生まれると同時に母が亡くなり、相模で父親の男手一つで育てられてきました。特に強調されるのは、父親が芳子をいかに深く愛していたかという一点です。たとえば、芳子が父親と寝ていると、夜中に少しも目を覚まさない。なぜだろうと思つて見ていると、父親は寝返りを打たないことに気付く。芳子が寝返りを打つてから、父親もそつと体を動かすということです。ところが、自分にはその真似が出来ず、つい寝返りをして芳子を起こしてしまうのだと反省している。どうです、こんな話、聞いたことがありますか？

芳子が伯父に預けられるに至った最大の理由は、父親が貧しかったからです。何せ兄さんと一緒に木履を作つて売っているような方ですから（笑）、生き方が下手だったのでしようね。どうしても昼間、稼ぎに出掛ける必要があります、その間は近所のおばさん、「嫗」に預けないといけません。ところが、当時の託児所などところはひどい人が多かったそうです。

といつて、今朝も新聞に、兵庫の方の保育園が、子どもらに給食もろくに食べさせなかつたなどと報道されていた。むごい話ですが、幼児は虐待されても、それを親に話

しませんから、昔も今もありがちなことなのです。周りの大人が気を付けないといけません。

東里は嘗て江戸で弟と二人で住んでいたところに、近所にそういうひどい託児おばさんがいて、「狼」と呼ばれていたそうで、その実態を観察し、心を痛めた経験があった。そのため、芳子が虐待にあうことを恐れたのですね。「新瓦」の中に、相模にいたころの芳子が、預けられていた近所の嫗の家で虐待されていたことを推理する一段がある。その一節です（私に訓読し、※印以下に語注を添えておきます）。

夫れ嬰兒を愛する者、或いは之れが聲を為し、以て之れを開諭す。然らざれば則ち之れを重言す。手を「手々」と曰ひ、乳を「乳々」と曰ひ、寝を「寝々」と曰ひ、起を「起々」と曰ふの類、是のみ。若し夫れ、鼓を「填々」と謂ふは其の声を重言す。食を「甘々」と謂ふは其の味を重言す。溺を「津々」と謂ふは其の貌を重言す。凡そ此くの如き類は、皆將に其の実を審らかにし以て之れを誨へんとす。豈に苟もする所ならんや。是れを「幼幼」と謂ふ。若し之れを賤悪せば、則ち然らざるなり。嬰兒は之れに化するが故に、其の言ふ所は乃ち其の聞く所なり。今汝、溺を「津津」と謂はずして之れを「小便」と謂ふこと、成人の如し。然れば則ち、嫗の汝に言を与ふるや、以て見るべし。其の驗

の三なり。

※○開諭 説き教える。○重言 ここは疊語の意。○手々以下、幼児語の「重言」の例。○苟もする所：「こゝは、ちやんと考えて言葉を発表する意。『論語』子路に「君子於其言、無所苟而已矣（君子は其の言に於て、苟もする所無きのみ）。○幼幼 幼い者を幼い者として適切に扱ふこと。『孟子』梁惠王上に「幼吾幼、以及人之幼（吾が幼を幼として、以て人の幼に及ぼす）」。

○賤悪 にくむ。

幼い芳子は「シイシイ」などの幼児語を使わず、「小便」などと言った。そこから、嫗が愛情をもつて適切に育てていなかったことを推理しています。まるで刑事コロンボみたいですね（笑）。こんな風に傍証となる「験」を、丁寧に次々と挙げてゆく。さらに、その行き着く先が最後の第五の験です。

氓の蚩蚩たる、嫗に非ざる莫し。此れを以て彼を知らば、何ぞ難きことの有らん。詩に云はずや、「他人、心有り、予、之れを忖度す」と。況んや、嫗の心、我、固より之れ有るをや。因て之れを忖度す。是れ何を執り、以て何を伐るなり。夫れ豈に遠からんや。其の験の五なり。此の五験を推して以て其の実を考えて、諸れを狼に比するも、亦宜ならずや。

※○氓の蚩蚩たる 氓は民。蚩蚩は無知。『詩経』国風・衛風に「氓之蚩蚩、抱布贸糸（氓の蚩蚩たる、布を抱いて

糸を賣ふ）。○他人、心有り：『詩経』小雅「巧言」に「他人有心、予忖度之（他人、心有り、予れ之れを忖度す）」。

○柯 木の枝で、斧の柄の意でもある。『詩経』国風・豳風「伐柯」に「伐柯伐柯、其則不遠（柯を伐り柯を伐る、其の則、遠からず）」。

手本は身近にある意。 どうです、こんな話、聞いたことがありますか？東里は、幼児を虐待する、血も涙もない嫗のような心が自分にもあるから、嫗が何をしたのかがわかるとまで言うのです。自己省察の極みとでも言えばよろしいのでしょうか。私はこの「新瓦」は、日本人必読の書だとさえ思います。

ただし、漢文なんですね。でもね、「新瓦」の別の段で東里は芳子に言っています。「吾は汝の読書せんことを欲するなり。苟も読書せざれば、以て娛しみを為すこと無し」と。しかも、読書といつても仮名書きのものだけではだめで、女子であっても漢籍を読まないといけなうと言っている。

さらに『東里外集』に和文の書簡が集められており、これがまた頗る面白い（図版5）。手紙の有り難いところは、東里の肉声に触れる感じが得られることです。東里の書簡は、晩年に佐野から相州浦賀に移り住んでからの十年余りの間に書かれたものがほとんどです。ちよつとだけ読んでみましょう。



図版 5

名を好む心は学問の大魔なり。早く名を棄て実を勤むべし。老拙、幼年より名を好むの病深く、近年以来殊の外うるさく覚候へ共、療治の力弱く御座候哉、いまだいえきり不申候。名を惜むと申候へば、よき事に聞え候へども、聖人の学者は義を惜み候間、名には貪着不致候。名をおしむ心有之候へば、事ごとに外聞をかざりて真実の心なく、世上のうはさを恐れて氣遣ひ多し。果には只名のために義をすつ〔る〕かたに成りゆき申候。たとへ大高名ありとも、義を失ひては恥しく口惜しく、日夜に心のはらしやうもあるまじく候へば、

羨しからぬ事に御座候。只義に於てかけたる所なければ、心はひろく気はのびて、少も不足も無之候へば、世上に而いかほどせしり笑とも、毛頭心にかゝることなく、各別の楽しみおもひやられ候。義と名とは、玉と石なり。取違ひなき様に扱ひわかつべき事に候。

弟と二人、木履を作つて売つていたような東里にして、「老拙、幼年より名を好むの病深く」と言うのですから、よくお聞き下さい。ここにはとても重要なことが書いてある。名譽よりも義が大事なんだという。義とは何かというと、道理です。そして、義を重んずるためには、名を意識的に避けないといけないと言っている。

今日はそれについて詳しく語る余裕がないので、一端のみ述べておきますが、日本の最も重要な美意識、ほかに適当な言葉がないので、それを武士道と読んでおきますが、武士道の要諦の一つは、「自分はもとよりのこと、他者、殊に敗者や弱者の名譽を重んずること」です。でもそれよりもっと大事なのは、もう一つの武士道の要諦、「道理を重んじ、感情や自己保身をそれに優先させないこと」なのです。真の武士道について、私は西鶴の武家物から学びました。東里はその最重要の理念を明確に語っています。

明治維新以降の日本は、大きな達成もしましたが、残念ながらこの義を重んずる精神に欠けるところがありました。近隣諸国に対する傲慢な態度、国内にあつては、義な

らざることに異を唱える者を徹底的にいじめたことなどがそれです。その行き着く先が一九四五であり、三・一一の原発事故なのです。この日本史上、最悪の二大災厄は明らかに人災です。当然、何でそんなことになったのか、きちんと総括しないといけないのに、ぜんぜんやっていない。そして、そんな風に日本の近代化を見直す際には、昔の人の残した（ふみ）、書物と書簡をきちんと読んだ者こそが真に貢献できるのです。

繰り返し同じことを述べますが、文学部の仕事は死者との対話です。そしてそこから得た知見を現世に還元することです。いかに文科省からいじめられようと、それは社会が健全性を保つために必要な最も人間らしい仕事で、それなしに明るい未来はないということを皆さんとともに再確認したいと思います。

最後に東里の自筆の手紙を見てください（図版6）。これは昭和九年に出た『佐野史蹟写真真帖』という郷土資料の写真集から複写したものです。予想を遙かに上回る、闊達で素晴らしい筆蹟ですよ。全文を翻字しておきます。

一、被思召付金式分被恵下、忝致拝納候。

一、大川十郎右衛門殿、弥御堅勝二御座候由、珍重奉存候。尚又宜御心得可被下候。御学問、定而御長達と奉察候。

一、芳子も宜申上候様二と申候。是も最早今年十六二罷成候。何とぞ相応之家有レかしと願申候。

旧冬以来少内談いたし申候。十が七八八成就可致と被存候。

女児壱人二付、心を勞シ候事数多二御座候へバ、大家之多事、誠ニ存やられ候。老拙事、年々老朽勿論

二候へども、前二申入候一箇ノ妄見を樂

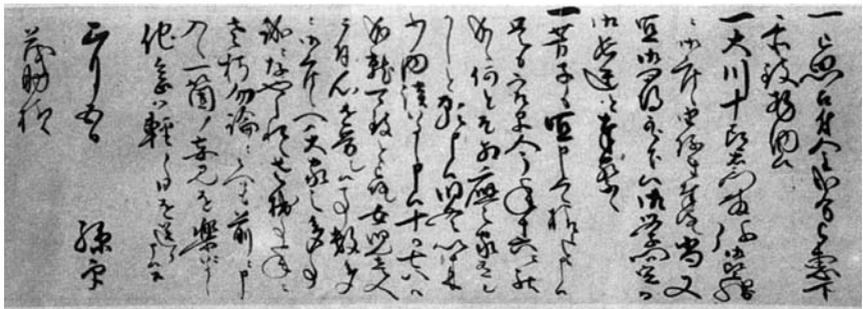
二いたし、他念ハ軽

く日を送り申候。以上

正月五日 孫平

茂助様

文中、芳子十六歳の文言により、宝暦九年、東里六十六歳の書簡とわかり



図版 6

ます。東里先生、お年ごろとなった芳子の縁談を気にして
おられます。さて、芳子ちゃんはある魅力的な女性に成
長したのでしょうか。

〔付記〕

一、本稿は平成二十九年三月二十二日、あいち国文の会（於・愛知
県立大学）での講演内容から、つまらぬ冗談を削り、言い忘れた
ことを加筆したものです。

一、『東里遺稿』については、糸川信也さん（故人）の編んだ昭和
四十九年刊『東里遺稿解』という全三百二十七頁の労作の注釈書
があります。『遺稿』読解の際には大いに参考としました。ただ、
発行部数が少なかつたらしく、かの「日本の古本屋」で数年見張っ
ても入手できず、宇都宮大学図書館からの相互貸出でようやく読
むことが出来ました。どうも東里関係の書物は流布部数が少ない
運命のようです。

一、昭和九年刊『佐野史蹟写真帖』の存在は、名大の美学美術史の
出身で、佐野市立吉澤記念美術館の学芸員、末武さとみさんに教
えていただきました。深く感謝申し上げます。

（しおむら こう）